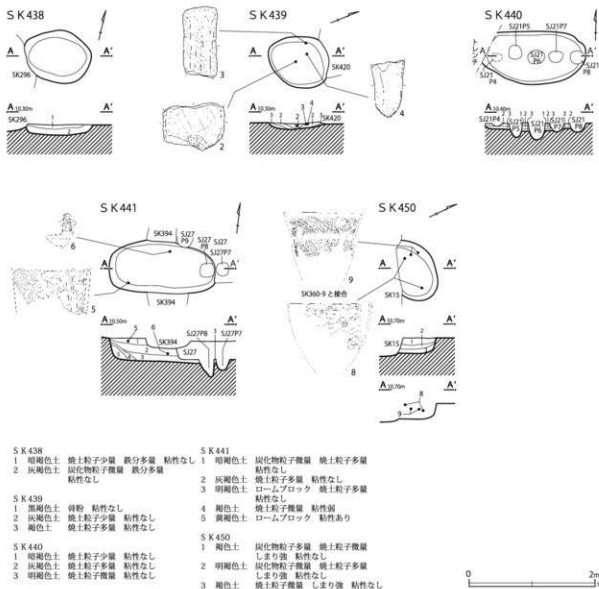




第268図 盛土第五面土壌

第439号土壌 (第268・269図)

J-6グリッドに位置し、北東端が第420号土壌に壊されている。長径0.95×短径0.81mの楕円形である。底部は中央部に向かって緩く傾斜し、検出面からの深さは0.09mである。覆土は自然堆積である。主軸方位はN-22°-Eである。

第269図1～4が、第439号土壌出土遺物である。

1は紐線文土器、2は磨石、3は砥石、4は敲石で、いずれも欠損品である。

第440号土壌 (第268図)

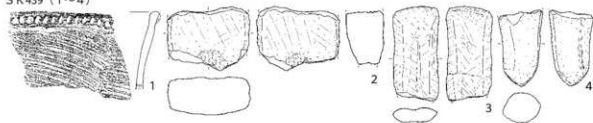
J・K-5グリッドに位置し、西端がトレンチ

に壊されている。第21号住居跡の柱穴によって、床や壁が壊されている。長径1.60m前後で短径0.85mの楕円形と推定される。検出面からの深さは0.13mである。覆土は自然堆積である。遺物は出土しなかった。

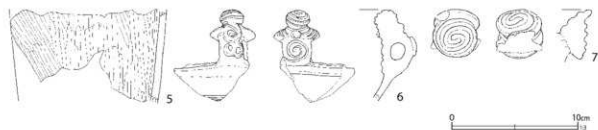
第441号土壌 (第268・269図)

K-7グリッドに位置し、第27号住居跡の柱穴や、第394号土壌に壊されている。長径1.70×短径0.83mの隅丸長方形である。底部は緩い起伏を持ち、検出面からの深さは0.40mである。覆土内から深鉢形土器の胴部や突起などが出土した。覆

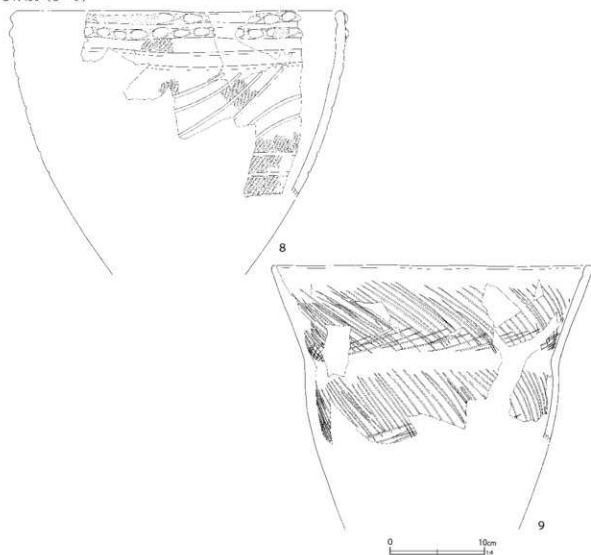
SK439 (1~4)



SK441 (5~7)



SK450 (8・9)



第269図 第五面土壇出土遺物

土は自然堆積である。主軸方位はN-83°-Eである。

第269図5～7が第441号土壌出土遺物である。

5は深鉢形土器の胴部で、全体に丁寧なミガキが施されている。残存部最大径15.0cm、残存高9.8cmである。6・7は加曽利B式土器の突起である。

第450号土壌（第268・269図）

K-6グリッドに位置する。第15号土壌に壊されており、全容が不明である。残存部の短径が0.70mで、楕円形の土壌と推定される。検出面からの深さは0.25mである。覆土内から、深鉢形土器や鉢形土器の大型破片が出土した。覆土は自然

堆積である。

第269図8・9が第450号土壌出土遺物である。

8は口唇がやや内湾し、内面に沈線が廻る鉢形土器である。口唇部を廻る2条の隆帯には、棒状工具により押圧が施されている。胴部の文様帯は平行沈線で区画され、弧状の沈線文が交互に配され、L R縄文が充填されている。推定口径33.0cm、残存高19.7cmである。

9は口頸部が直線的に開き、口唇内面に沈線が廻る深鉢形土器である。口頸部と胴部に、矢羽状の沈線文が描かれている。推定口径32.4cm、残存高18.9cmである。

6. 盛土出土の遺物

第一面を除いて、盛土と想定されるH～Kグリッドの包含層からは、器形のわかる土器や破片類が多量に出土した。また、石器をはじめ、土製品や石製品などの出土量も多い。盛土内は、遺構の検出面が二面から五面に分かれており、遺構と検出された遺物については、それぞれの面毎に記載した。遺構に帰属しない包含層の遺物については、出土した面を併記して、グリッド毎に掲載した。

H-7グリッド

土器（第270図1～7）

出土した土器は少なく、安行3 b式が主体である。

土製品（第270図8・9）

8は土製の蓋と想定される。三叉状沈線文が描かれている。9は土製円盤である。

土偶（第270図10）

10は左腕である。腕部は無文で、肩部寄りに細沈がわずかに見られる。現存高は3.4cm。色調は灰褐色で、赤彩痕が一部に残る。胎土は密で長石がわずかに混じる。焼成は良好である。後期の土偶と思われる。

石器（第270図11～16）

11～13が石鏃、14が敲石、15・16が磨石である。

H-8グリッド

土器（第271図1～27）

1は口唇が外反する鉢形土器で、口唇部と胴部にL R縄文が充填施文される。推定口径21.4cm、残存高8.6cmである。

4は無文の粗製深鉢形土器で、器面はナデ整形が施されている。推定口径21.8cm、残存高13.6cmである。

2・3・5・6は底部である。粗製深鉢形土器で、粗いナデ整形が施されている。

7はミニチュアの鉢形土器である。無文の粗いつくりで、器面はナデ整形されている。口径2.6cm、底径3.8cm、器高4.3cmである。

8～27に破片を掲載した。8は堀之内1式、9は加曽利B式、10・11は安行1式、12～21・25～27は安行3 a～3 b式、22～24は安行3 c式であろう。

土製品 (第271図28)

小型中実の耳飾りで、片面に細かな刻みが、片面には刺突が施されている。

石器 (第271図29)

29は石鏃で、先端部が欠損している。

H-9グリッド

土器 (第272図1～第273図34)

1は口唇に3個一對の突起を持つ鉢形土器で、丁寧な作りである。L R縄文を地文とし、沈線で区画された文様帯に、平行沈線で右傾するクランク状の主文様が描かれ、沈線間が磨消されている。空間にギザ状や三叉状のモチーフが配され、一部が磨消されている。口唇部の突起や文様構成に、東北的な様相が感じられる。磨り消しを伴う雲形文と羊歯状文の意匠が合体しており、羊歯状文の文様に近いクランク文間が磨消されたため、雲形文の図と地の関係が逆転しているものと推察される。安行3b式期であろう。推定口径35.0cm、残存高20.9cm、推定器高24.0cmである。

2は口頸部に入り組み文が施され、区画間や文様間に、L R縄文が充填施文されている。推定口径17.6cm、残存高8.3cmである。

3は4単位波状口縁の深鉢形土器である。波長部直下の突起に接して描かれた区画線や鋸歯状の平行沈線文間には、細長い刻みが施されている。胴上部には、下向きの弧線が密に施文されている。安行3c式である。推定口径21.0cm、残存高19.6cmである。

4は口唇が内傾する晩期の粗製深鉢形土器である。器面には粘土の輪痕が残されている。推定口径29.4cm、残存高35.5cm、推定高36.5cmである。

5～11に底部を一括した。5にはL R縄文、11にはR L縄文が施文されている。7は木槌痕、8には工具痕が認められる。

12～34に破片類を掲載した。12～15は加曾利B式、16～23は安行3a～3b式で、22は姥山系の

土器である。24～27は安行3c式、28～33は晩期の粗製土器である。

石器 (第273図35)

欠損しているが、形状から敲石と考えられる。

I-6グリッド

土器 (第274図1～第277図89)

1は3単位波状の深鉢形土器で、突起下を廻る沈線間にL R縄文が充填され、縦に区切られている。磨消や器面のミガキも丁寧である。加曾利B1式である。推定口径21.4cm、残存高16.6cmである。

2は粗製紐線文系土器である。口唇が内傾し、胴上部の最大径付近が区画される。右傾する沈線が施され、口唇上と胴部区画線間には刺突が施されている。推定口径21.8cm、残存高24.4cmである。

3～6に底部を一括した。3には網代痕が認められる。3～5は底部の形状や整形から後期後葉と考えられる。6は安行式であろう。

7以降に破片を掲載した。7～12は堀之内1式、13～18は堀之内2式である。19～40は加曾利B式の精製土器、41～46は粗製土器である。

47・48は安行1式、49・50は安行2式、51～75は晩期安行式である。

76～83は紐線文系土器、84～88は晩期の粗製土器である。

89はミニチュア土器で、口唇が内湾する深鉢形を模したものであろう。器面にはへら状工具によるナデが施されている。推定口径6.5cm、残存高4.6cmである。

土製品 (第277図90～93)

90は土製円盤で、1点のみである。

91～93は耳飾りである。93は環状で大型の耳飾りで、無文である。91・92は中実小型で、側面が緩く窪む耳飾りである。いずれも無文である。

土偶 (第277図94・95)

94は左脚である。粘土板を芯に巻きつけて成形

され、無文である。現存高は7.4cmで、比較的大型な土偶の脚であろうと思われる。風化が激しくかなり磨耗している。色調は黒褐色、胎土は粗く長石の混入が目立つ。焼成は良くない。後期中葉から後葉の土偶と考えられる。

95は左腕である。現存高は3.0cmで無文である。腕の断面は円形である。色調は橙褐色で、胎土は密、焼成は良好である。晩期の土偶であろう。

石器 (第277図96～102)

96・97は石鏃で、いずれも欠損品である。100は小型の磨製石斧で、全面が丁寧に研磨されている。98・99・101・102は磨石で、101は面取りされ、形状が整えられている。

1ー7グリッド

土器 (第278図1～第281図64)

1は口唇直下から垂下する沈線間に、蛇行沈線文が描かれている。地文はL R縄文で、胴下部には施文されない。推定口径27.4cm、残存高22.9cmである。堀之内1式土器である。

2は口唇に突起を持ち、器面胴上部の平行沈線間に、鋸歯状の沈線文が施文されている。灰黄色砂質で、他とは胎土・色調が異なっている。推定口径16.6cm、残存高7.5cmである。

3は底部鉢形土器で、沈線で底部が区画されている。晩期安行式である。残存部最大径24.8cm、残存高8.4cmである。

4は口唇に双頭状の小突起を持つ鉢形土器である。口唇部と胴上部に沈線が廻り、L R縄文が充填されている。晩期安行式である。推定口径20.4cm、推定器高11.5cmである。

5～7は沈線とやや細かな刺突を組み合わせ文様が描かれた土器で、10に先行する土器群と考えられる。5は口唇が直立し、口唇上に押圧が施されている。胴部が張る深鉢形土器で、平行沈線で区画された文様帯内に入り組み文が描かれ、区画と文様内に刺突が施されている。推定口径19.0cm、残存高13.3cmである。

6は口唇下と胴下部を廻る平行沈線間に、刺突が充填されている。推定口径22.0cm、残存高7.4cmである。

7は口唇が外反し、胴上部が張る深鉢形土器と推定され、5と同様の文様が施文されている。推定口径18.0cm、残存高10.0cmである。

8は胴上部で括れ、口唇が外販する深鉢ないしは壺形土器であろう。口唇部に小突起を有する。胴上部の文様は、平行沈線で鋸歯状のモチーフが描かれるものと推定され、沈線間に刺突が充填されている。推定口径14.8cm、残存高5.0cmである。

9は8と近い文様構成と思われる。肥厚した口唇部と文様間に刺突が充填されている。推定口径20.8cm、残存高5.9cmである。

10は推定5単位の波状口縁を持つ深鉢形土器である。胴上部のくびれ部を廻る平行沈線で文様帯が区画され、口頸部には入り組み文内到大振りな刺突が充填されている。文様を描く沈線が幅広い特徴がある。胴上部には弧線が密に廻っている。安行3c式である。推定口径23.4cm、残存高17.8cmである。

11・12は無文の深鉢形土器である。11は4単位波状口縁で、波長部に扁平な粘土帯が貼付されている。器面はヘラ状工具でナデ整形されている。推定口径18.6cm、残存高18.8cmである。

12は粗製の無文塚輪形土器で、口唇部に突起を有する。輪積痕や指頭による圧痕が残されている。推定口径23.7cm、残存高16.5cmである。

13～19に底部を一括した。14は台付き鉢形土器であろう。17には工具と思われる圧痕が残されている。

20は粗製土器胴部に付けられた人面である。眉から鼻・眼・口は、いずれも粘土紐および粘土粒の貼付けで表現され、眼と口は中央が凹められている。土器の内面には輪積痕が残る。現存高は7.0cmである。色調は淡い黄褐色である。胎土は密で長石を多く含み、焼成は良好である。安行3

c式期の土器である。

21～64に破片を掲載した。21・22は堀之内1式、23・24・26・27は加曽利B式、25は曾谷式である。

28・29は安行1式、30～64は安行3a～3b式の有文および無文の粗製土器である。

土製品 (第281図65～69)

65は土製円盤である。66は円盤状で、側縁が鋭角に整形されている。蓋であろうか。

67は環状で大型の耳飾りである。断面滑車型で、片面が沈線や印刻で立体的に作出され、細かな刻みが施されている。

68は中実小型の耳飾りで、中央部が窪み断面滑車型である。片面が大きく開き、沈線文が施文されている。

69は中実小型の耳飾りである。中央部が窪み、無文で粗いつくりである。

土偶 (第281図70)

70は右腕で、現存高は2.5cmである。無文で、つくりは雑である。色調は赤褐色、胎土は密、焼成は良好である。晩期の土偶であろう。

石器 (第281図71～第282図87)

71は反面が剥離しているが、横断面は楕円形の石剣と推定される。横位の溝が多段に廻り、鋸歯状のモチーフが掘り込まれている。

72は円柱状で、端部に溝が彫り込まれている。石棒の基部であろう。

73は石核である。74～79は石鎌で、74～76は有基、77は平基、78・79は凹基である。

80は両端に切り込みを持つ石錐である。81は小型の磨製石斧で、前面に丁寧な研磨が施されている。

82は打製石斧、83～86は磨石である。86は角柱状に整形され、両面に窪みを有する。87は石皿である。

1-8 グリッド

土器 (第283図1～第285図62)

1は残存部位が少ないが、堀之内2式の大型

注口土器と思われる。

2は後期安行式の粗製土器である。推定口径23.0cm、残存高4.0cmである。

3は無文の壺形土器であろう。器面は丁寧に磨かれている。推定口径11.8cm、残存高3.9cmである。

5は晩期の粗製無文深鉢形土器である。推定口径30.2cm、残存高17.3cmである。

4・6～9に底部を一括した。6はへら状工具で粗いケズリが施されている。8は壺ないしは鉢形土器であろう。

10～62に破片を掲載した。10・11は磨消懸垂文の加曽利EⅢ式土器である。

12～16は堀之内1式で、15・16は隆帯で器面が縦区画されている。17～21は堀之内2式である。

22～28は加曽利B式、29・30は曾谷式、33～38は後期後半の細線文系土器である。

39・40は安行3a式であろう。41～57は安行3b式と平行期の土器と考えられ、50・51はモチーフ間に細かな刺突が施されている。52・53には沈線が充填されている。55は大洞式系の土器と考えられる。

58・59は安行3c式、60～62は晩期の粗製土器である。

土製品 (第285図63～70)

63～68は土製円盤である。

69・70は環状大型の耳飾りで、69は片面端部がやや肥厚し、沈線文が描かれている。70は片面が内屈し無文である。

土偶 (第286図71・72)

71は右脚である。現存高は4.2cm。無文で、つくりは粗雑である。色調は灰黄褐色から灰黒色を呈し、胎土は密、焼成は良好である。後期の土偶である。

72は右腕である。手握ねの痕が残る、つくりは雑である。肩部に2条の細沈線、上腕部に1条の沈線が残る。胴部からの剥離面は平滑である。現存高は5.7cm。腕の断面は、ほぼ円形である。色

調は赤褐色で部分的に黒褐色、胎土は密、焼成は良好である。晩期の土偶である。

石器 (第286図73～86)

73～75は有基の石鏃である。76は基部と先端部が欠損した石鏃である。

77はスクレイパーである。

78は小型の磨製石斧で、片側縁と基部が欠損している。

79は打製石斧で、全体に風化が著しい。

80～85は磨石、86は礫石である。

J-5 グリッド

土器 (第287図)

1は微隆起線で文様が描かれた加曾利EⅣ式の甕形土器であろう。

2～10は加曾利B式から曾谷式、11～22は晩期安行式の破片である。23・24の底部破片は、後期後半の所産と思われる。

J-6 グリッド

土器 (第288図～第303図)

当該グリッドからは、器形がわかる資料が最も多く出土した。

1は算盤玉状の胴部を有する深鉢形土器である。胴上部には弧状の平行沈線文が描かれ、L R縄文が充填されている。胴下部には右傾する沈線が描かれている。加曾利B 3式であろう。残存部最大径26.8cm、残存高7.6cmである。

2は沈線で格子目文が描かれた加曾利B式の胴部である。残存部最大径17.0cm、残存高12.2cmである。

3は推定4単位の大波状口縁深鉢形土器である。口唇下に断面カマボコ状の隆帯が巡り、口唇部に沈線、隆帯上には刻みが施されている口頸部と胴部が沈線で区画され、鋸歯状に垂下する沈線が施文されている。高井東式である。推定最大径34.0cm、残存高20.2cmである。

4は後期後半の無文土器である。口唇内面に沈線が廻り、器面は丁寧なミガキが施されている。

推定口径26.0cm、残存高24.0cmである。

5～8は後期安行式帯縄文系の深鉢形土器である。

5は口唇部が肥厚し、角頭状に面取りされている。隆帯に沈線が並走し、口唇部には刻みのない粘土瘤が添付されている。隆帯上にはL R縄文が施文されている。安行1式である。推定口径19.8cm、残存高6.0cmである。

6は帯縄文が扁平で、粘土瘤には刻みが施されている。縄文はR Lである。安行2式である。推定口径19.6cm、残存高15.3cmである。

7は帯縄文が扁平で沈線も伴わない。粘土瘤も見られないが、安行2式であろう。推定口径21.4cm、残存高15.3cmである。

8は口唇下に円形の貫通孔を持つ、安行2式の深鉢形土器である。推定口径12.0cm、残存高9.0cmである。

第289図9～第290図24には、晩期安行式の有文土器を掲載した。

9は頸部が直立し、口唇が外反する鉢形土器である。口唇には刻みを持つ突起が、推定4単位配される。頸部には、同心円状とそれを囲む弧状の沈線が配され、文様間には三叉文が印刻されている。空白部にはR L縄文が充填されている。頸部と胴部は隆帯で区画され、隆帯上には楕円形の押圧が施されている。安行3 a式である。推定口径12.8cm、残存高6.6cmである。

10は帯縄文系の深鉢形土器で、口唇上には2個一対の小突起が配されている。口唇部と下部には、刻みを持つ突起が配され、沈線で連結されている。沈線間には、対弧状の沈線が描かれ、R L縄文が充填されているが、陰陽の表現があいまいである。推定口径18.0cm、残存高8.1cmである。

11は帯縄文系の深鉢形土器で、口唇上の2個一対の台形状の突起下に蛇行沈線文が垂下し、両側には垂下する鋸歯状の沈線文が描かれている。沈線間にはR L縄文が充填されている。安行3 a式

である。推定口径21.0cm、残存高7.4cmである。

12～14は波状口縁の帯縄文系深鉢形土器である。

12は2個一對の波状口縁で、波頂部に刻みが施され、波頂部直下には、刻みを持つ粘土瘤が添付されている。口頸部は、波頂部直下と胴上部に、刻みを持つ小振りな粘土瘤を連結する帯縄文で区画され、沈線による入り組み文が描かれている。文様間には、帯縄文に並走する沈線の一端が延び、三叉文に表現されている。安行3 a 式である。推定口径17.4cm、残存高14.7cmである。

13は推定4単位の波状口縁で、波頂部が扇状に開き、押圧が施されている。口頸部と胴部に文様帯を持ち、押圧が施された小突起を連結するように隆帯が添付されているが、隆帯上に縄文は施されていないようである。安行3 a 式であろう。推定口径19.0cm、残存高11.7cmである。

14は4単位波状口縁で、波頂部に押圧が施されている。文様は小突起を連結する沈線で描かれ、沈線間に縄文は施文されていない。つくりの粗い土器である。安行3 a 式であろう。推定口径20.5cm、残存高11.5cmである。

15は胴上部に文様帯を持つ深鉢形土器である。口唇がやや外反し、口唇上に小突起が付されている。胴部文様は入り組み文で、文様内にはL R縄文が充填されている。安行3 b 式であろう。推定口径29.2cm、残存高20.4cmである。

16は胴上部が張り、口頸部が外反する深鉢形土器である。胴部文様は突起を中心に入り組み文が描かれ、文様末端が三叉上に表現されている。沈線文の一部には、刺突が並走している。安行3 b 式である。残存部最大径23.4cm、残存高8.0cmである。

17は口唇上に突起が付された浅鉢形土器である。文様は、口唇直下の沈線に接して弧専門が巡り、以下には弧線が上下対抗して入り組み状に描かれている。沈線文間にはR L縄文が充填されている。推定口径22.2cm、推定器高8.2cmである。

第290図18～21には台付土器を一括した。18は台付鉢もしくは浅鉢形土器であろう。曲線的な沈線文が描かれ、R L縄文が充填されている。残存高5.5cmである。

19は台部に隆帯が巡り、楕円形の押圧が施されている。残存高10.3cmである。

20・21は台部の破片で、20は外反しL R縄文が施文されている。20は小型で、L R縄文が施文されている。底径16.0cmである。21は底径5.0cmである。

22は注口土器である。口唇上に推定2個一對で押圧が施されて突起が付されている。文様は屈曲した胴上半にあり、注口部を中心に弧状や曲線的な文様が配されている。安行3 a 式であろう。推定口径10.6cm、残存高13.1cmである。

23は角底で小型の土器である。底部四隅が緩く隆起し、底部には直線や弧状の沈線文が配されている。胴部には弧状の沈線が配され、R L縄文が充填されている。底部推定径は7.0cm、残存高5.1cmである。

24は無文で鉢形土器であろう。

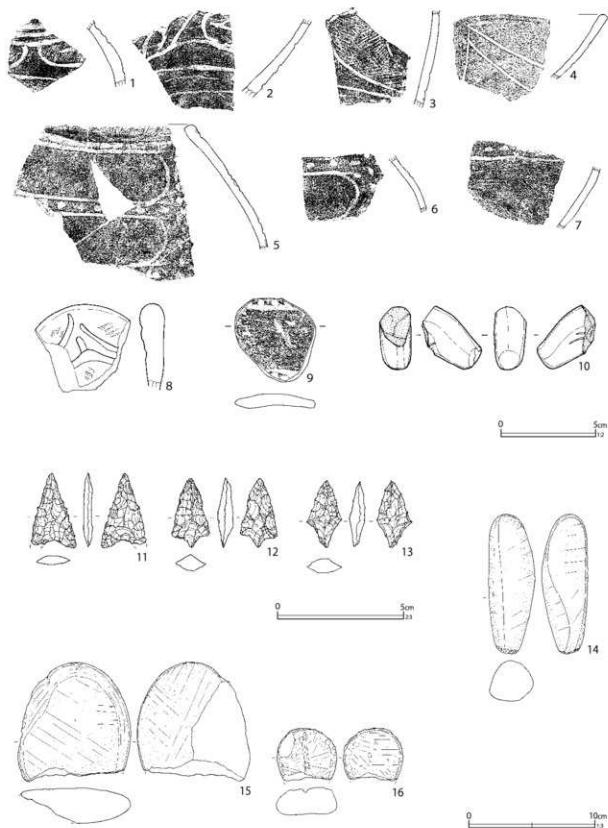
25は口唇直下に沈線で区画された幅狭い文様帯を持ち、縦位の対抗する弧線文や、上下対の弧専門が描かれている。つくりの粗い土器である。推定口径22.2cm、残存高6.4cmである。

第290図26～第291図34に、粗製紐線文系土器を一括した。いずれも胴中位から上半に最大径を持ち、口唇直下と胴部に、沈線で画されて刺突が廻る深鉢形土器である。器面には沈線が施されている。

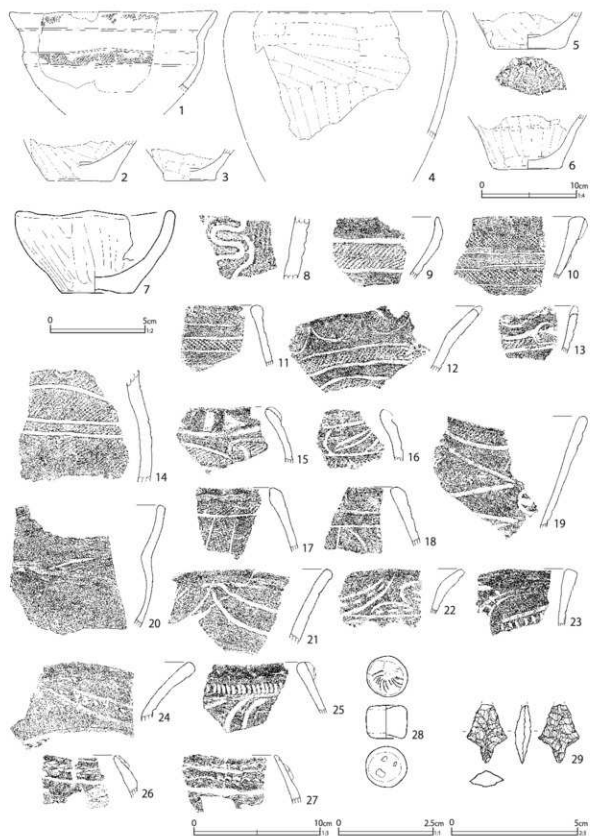
26は口唇が内傾気味で、垂下する沈線は間隔が粗い。推定口径24.0cm、残存高33.7cmである。

27・28は胴上部に対向して垂下する弧状の沈線が施文されている。27は口唇と胴部に隆帯が廻っている。27は推定口径19.6cm、残存高16.0cm、28は推定口径24.6cm、残存高10.6cmである。

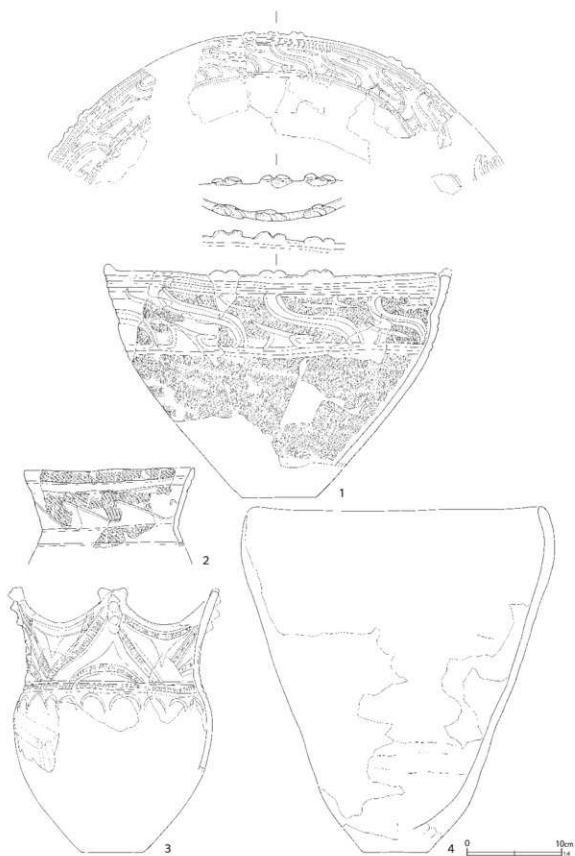
29は口唇が肥厚し、平坦に面取りされている。



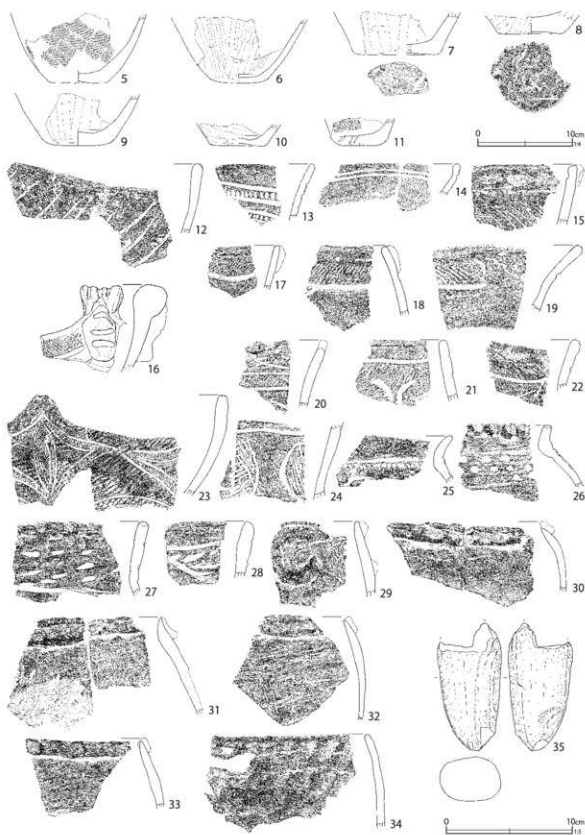
第270図 盛土 (H-7グリッド) 出土遺物



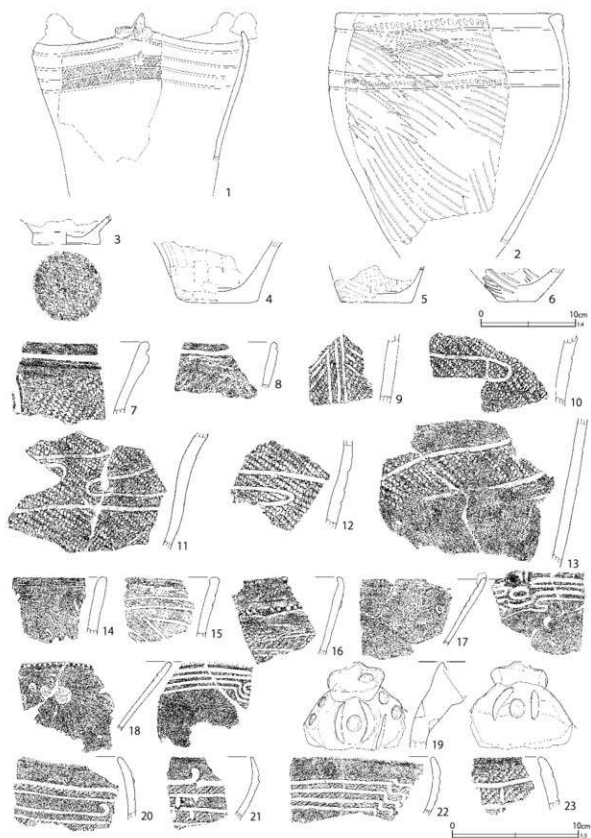
第271図 盛土 (H-8グリッド) 出土遺物



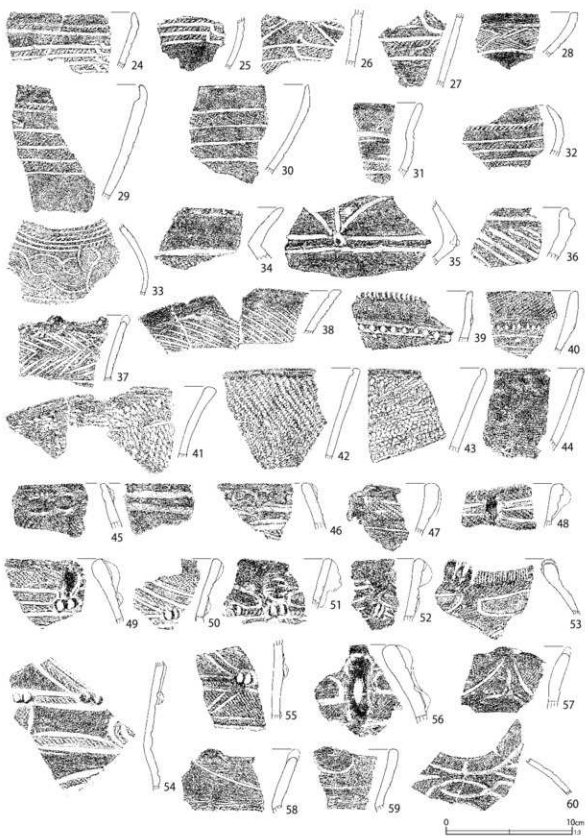
第272図 盛土 (H-9グリッド) 出土遺物 (1)



第273図 盛土 (H-9グリッド) 出土遺物 (2)



第274図 盛土 (I-6グリッド) 出土遺物 (1)



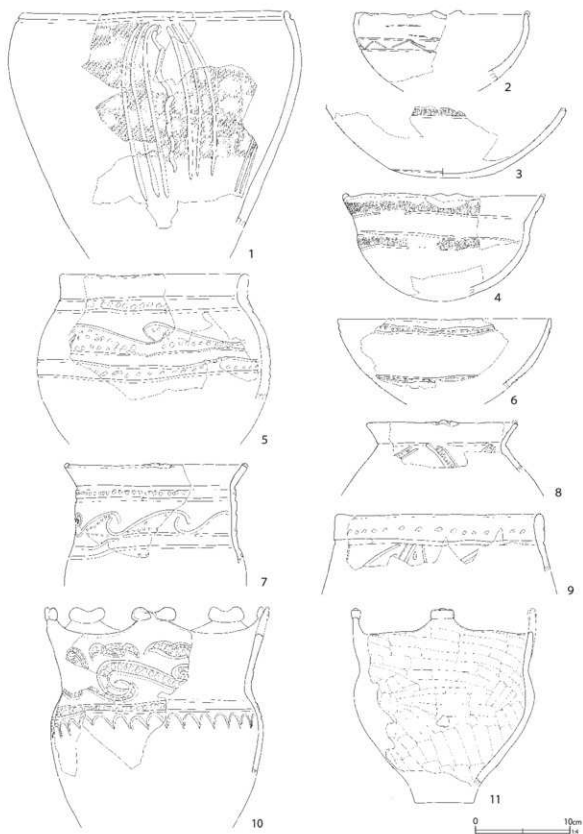
第275図 盛土 (I-6グリッド) 出土遺物 (2)



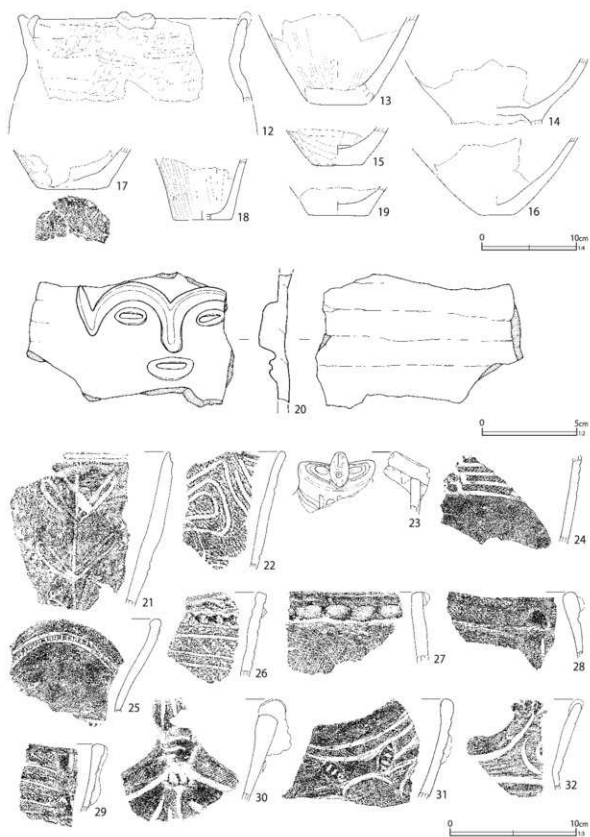
第276図 盛土 (I-6グリッド) 出土遺物 (3)



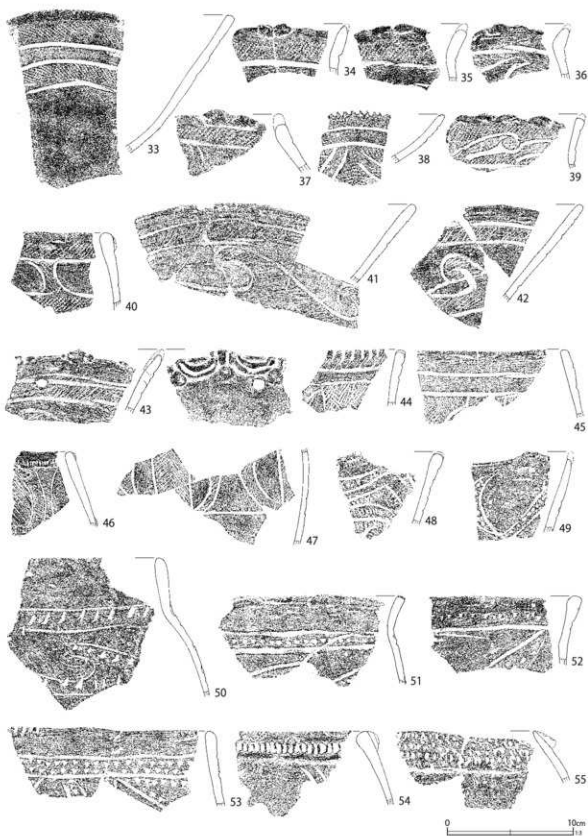
第277図 盛土 (I-6グリッド) 出土遺物 (4)



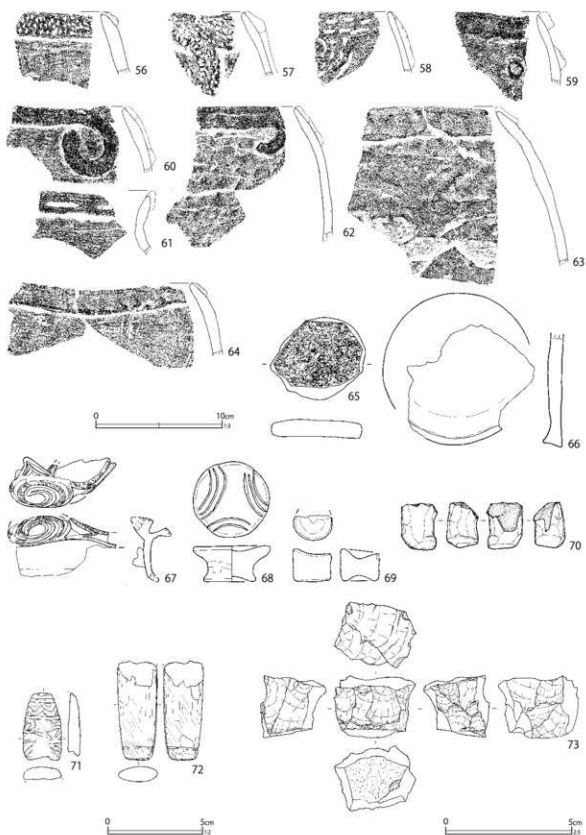
第278図 盛土 (I-7グリッド) 出土遺物 (1)



第279図 盛土 (I-7グリッド) 出土遺物 (2)



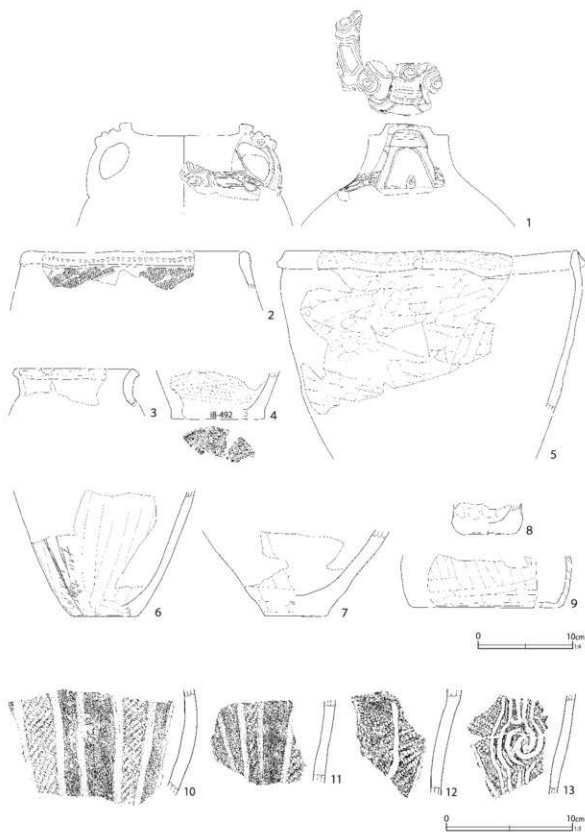
第280図 盛土 (I-7グリッド) 出土遺物 (3)



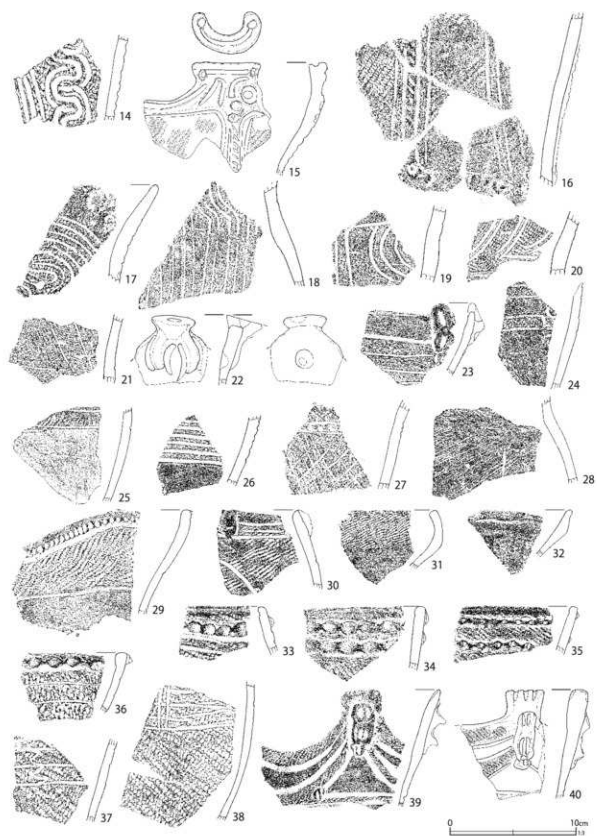
第281図 盛土 (I-7グリッド) 出土遺物 (4)



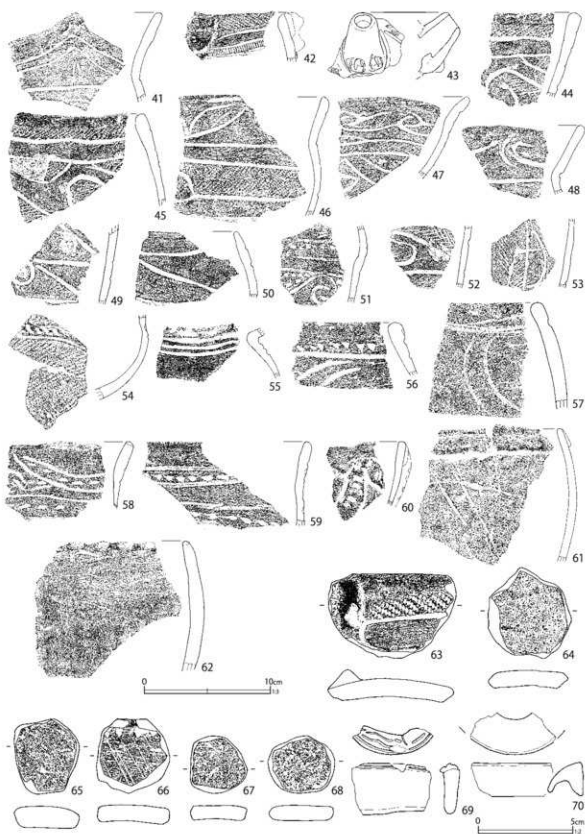
第282図 盛土 (I-7グリッド) 出土遺物 (5)



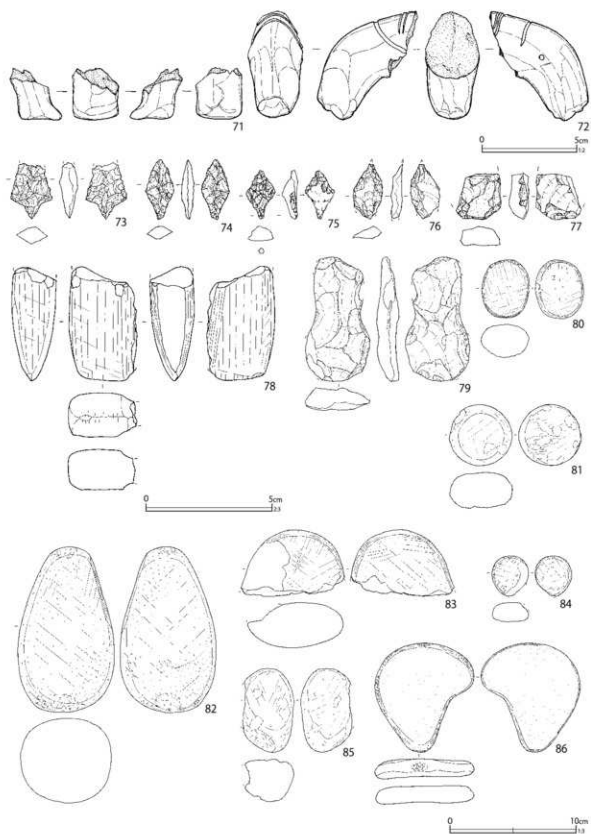
第283図 盛土 (I-8グリッド) 出土遺物 (1)



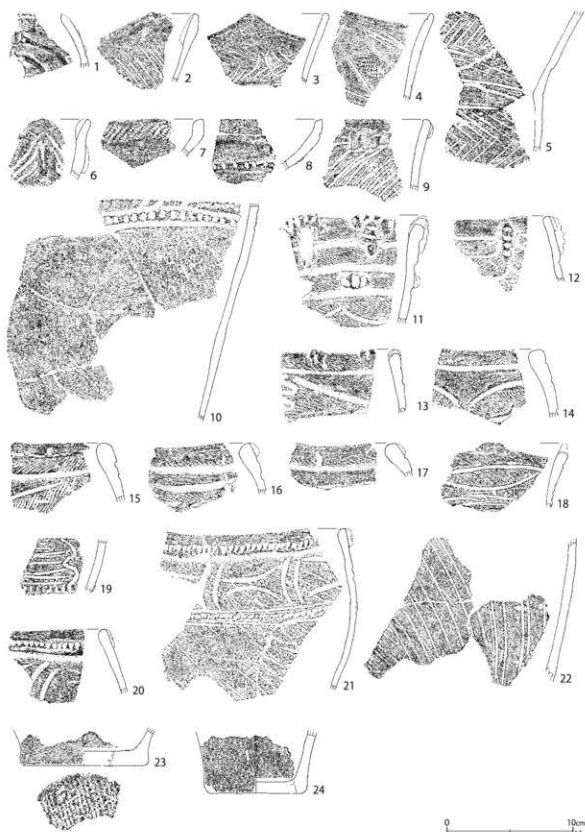
第284図 盛土 (I-8グリッド) 出土遺物 (2)



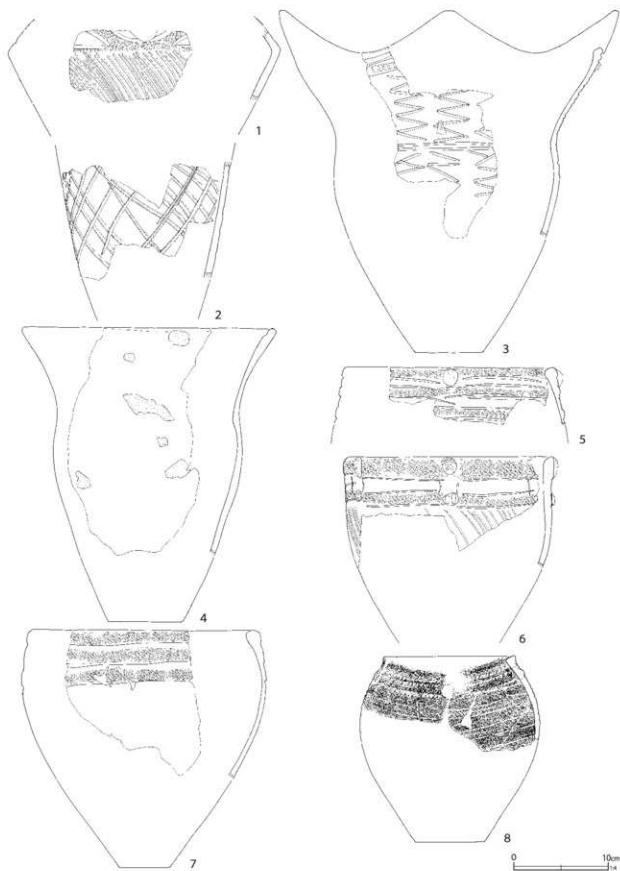
第285図 盛土 (I-8グリッド) 出土遺物 (3)



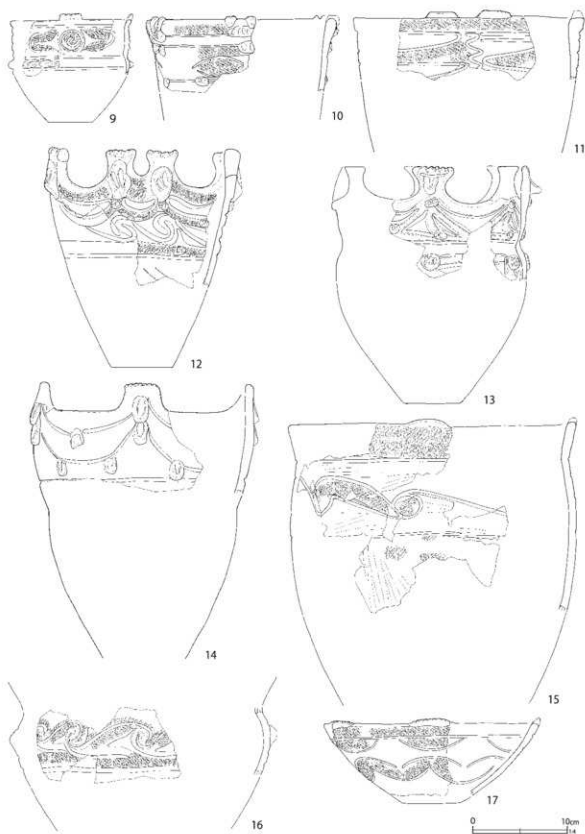
第286図 盛土 (I-8グリッド) 出土遺物 (4)



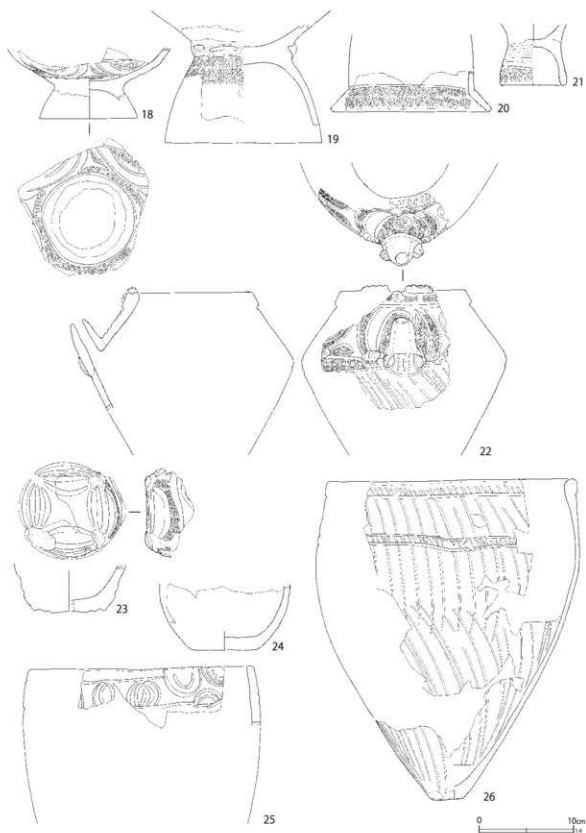
第287図 盛土 (J-5グリッド) 出土遺物



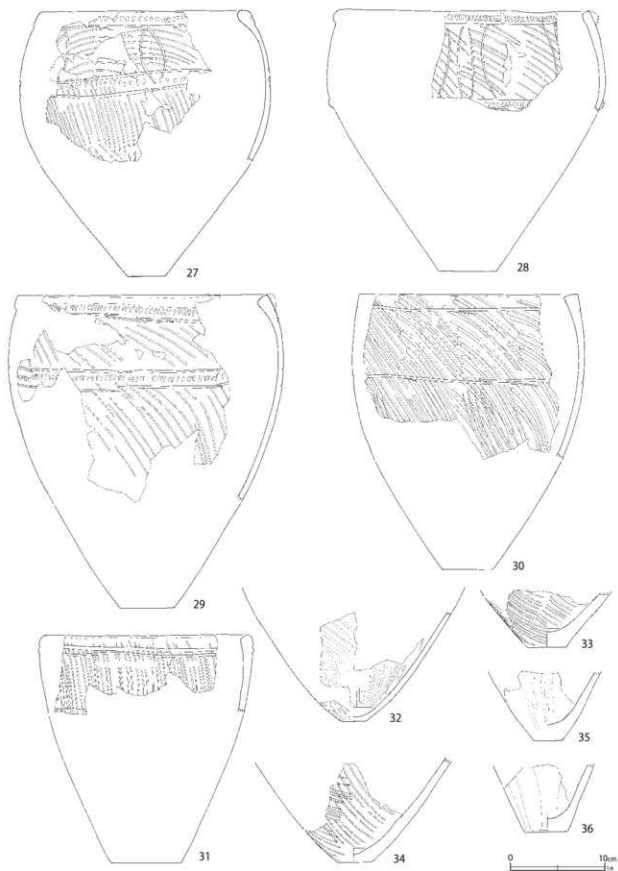
第288図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (1)



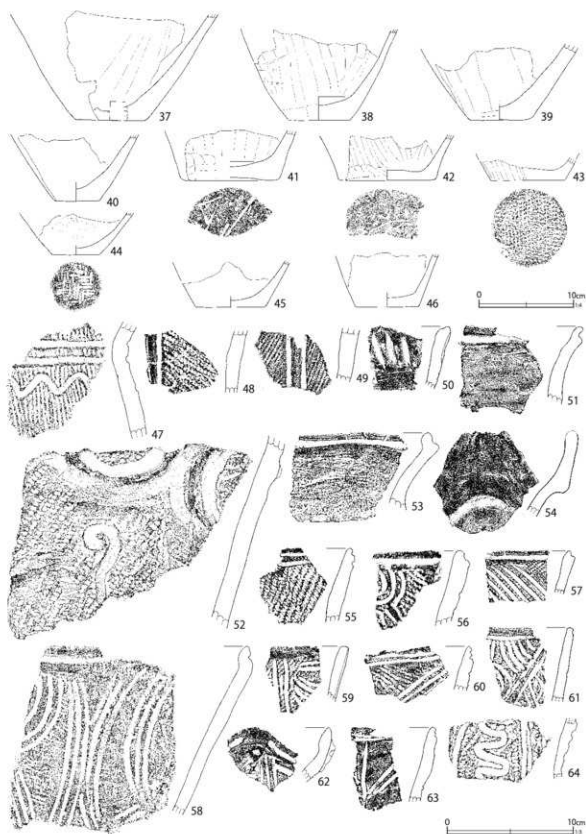
第289図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (2)



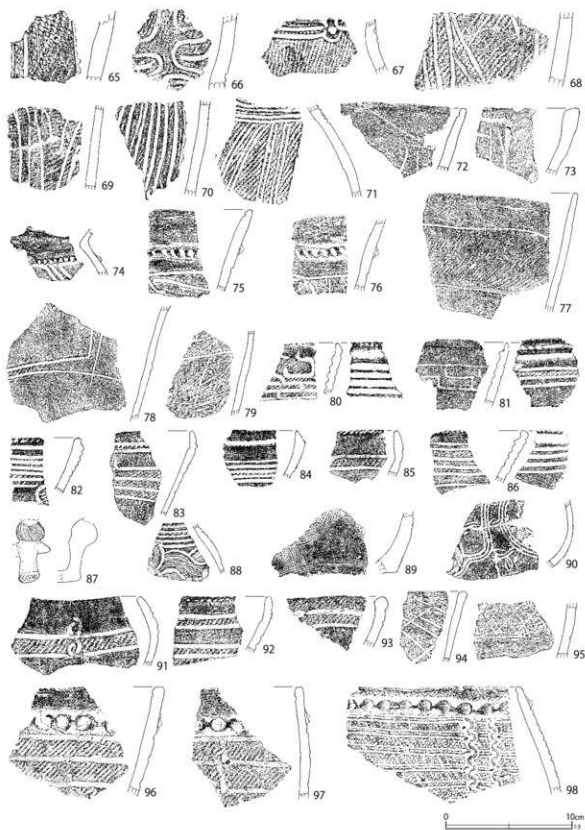
第290図 盛土(J-6グリッド)出土遺物(3)



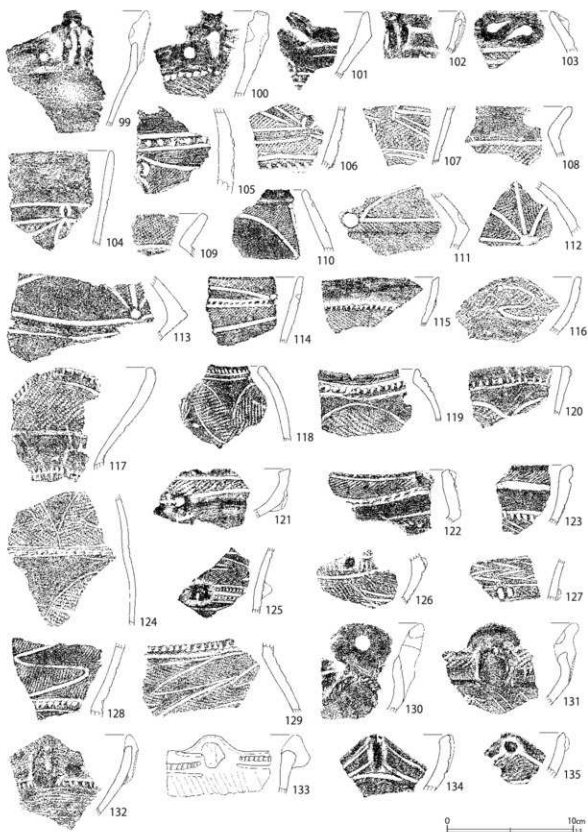
第291図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (4)



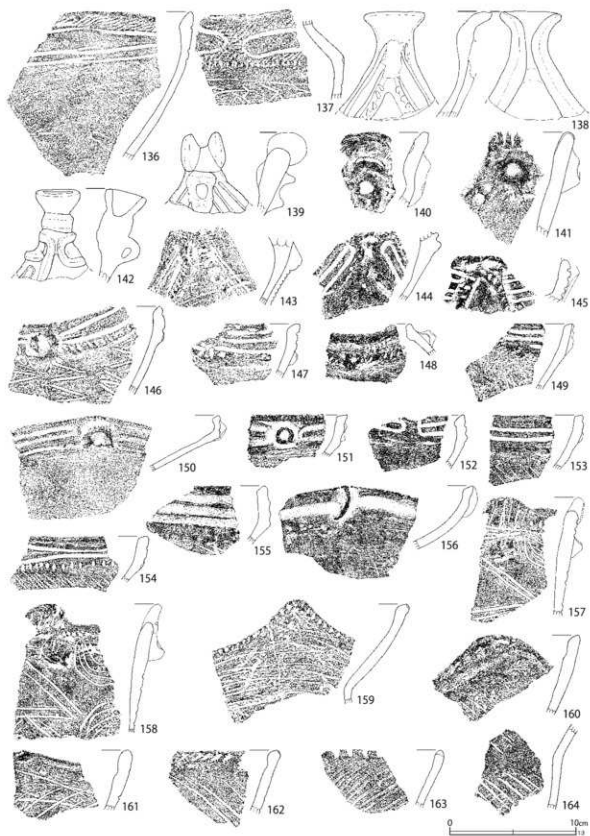
第292図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (5)



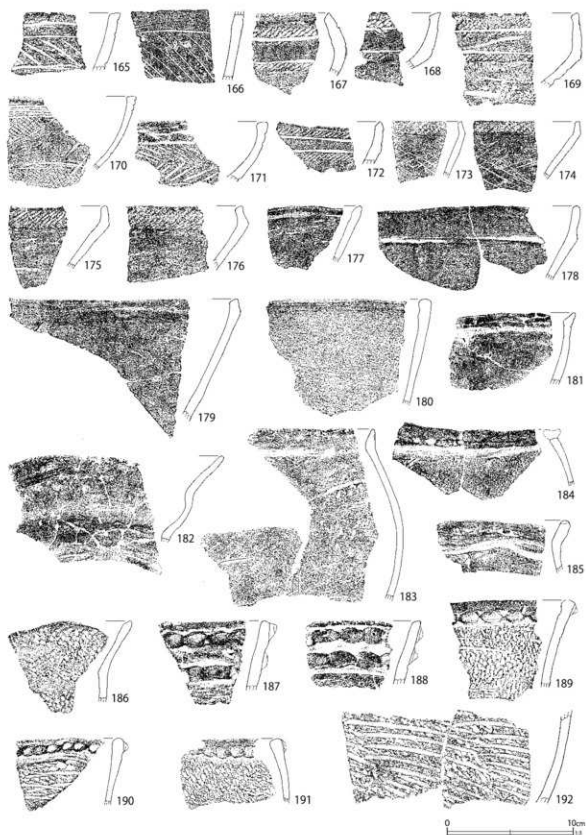
第293図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (6)



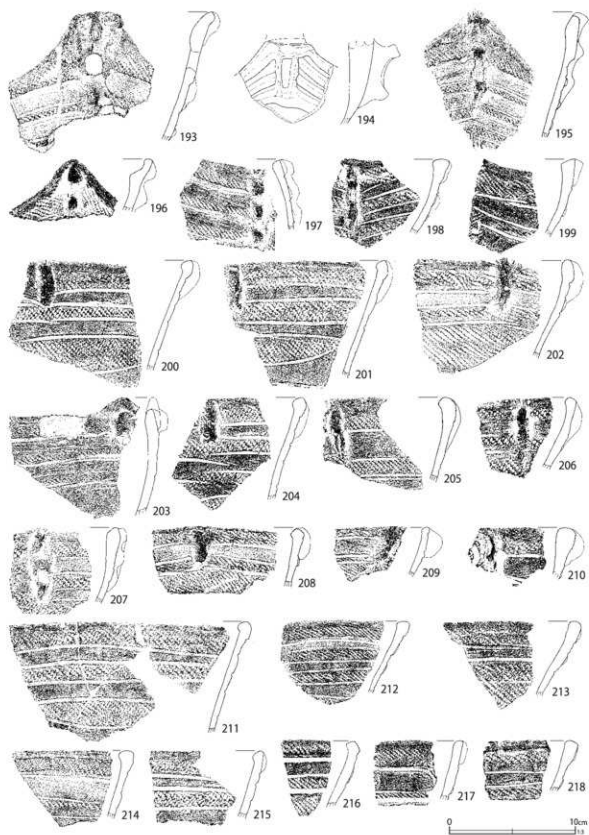
第29図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (7)



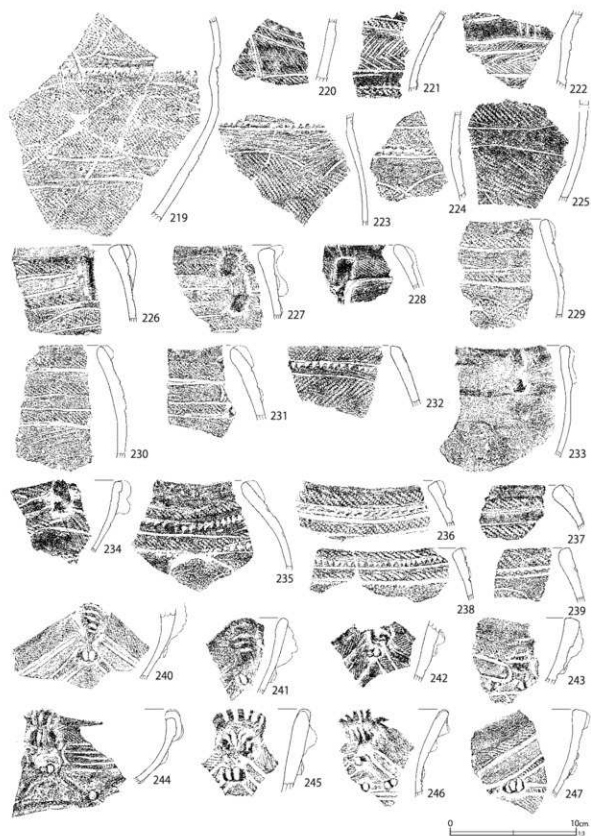
第295図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (8)



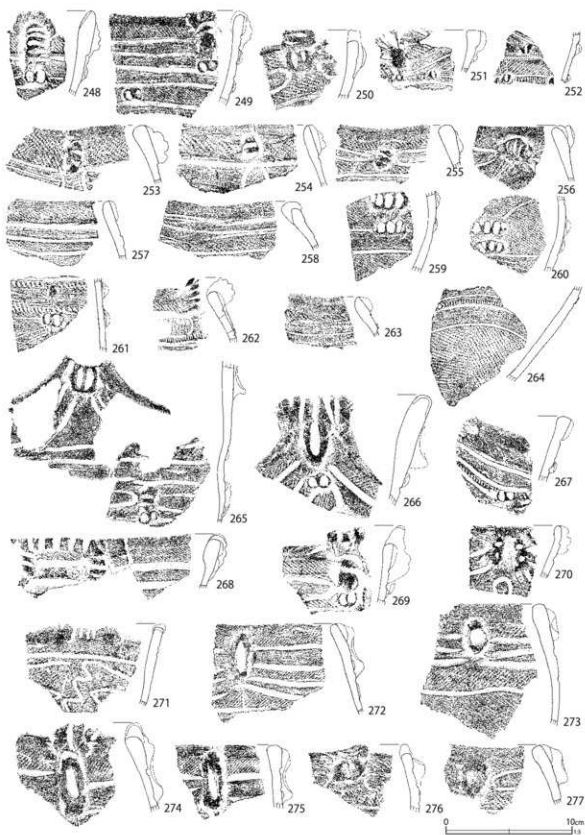
第296図 盛土(J-6グリッド)出土遺物(9)



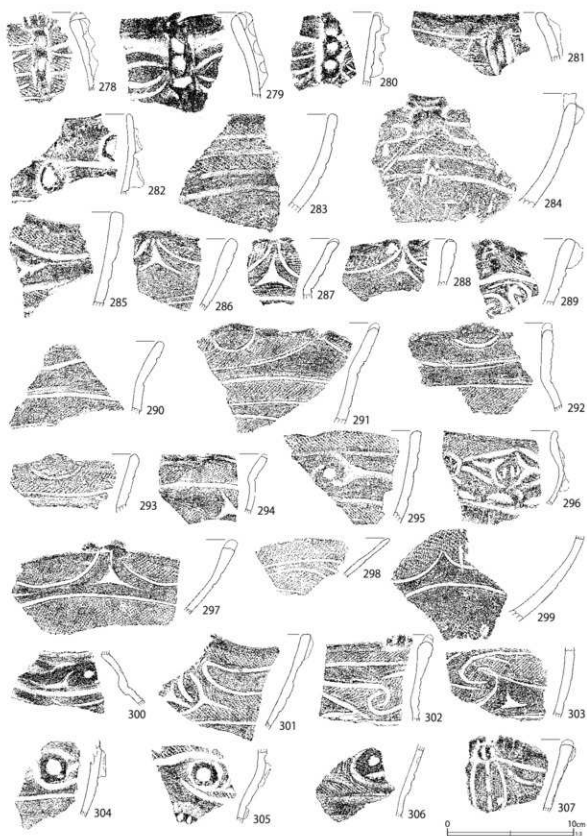
第297図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (10)



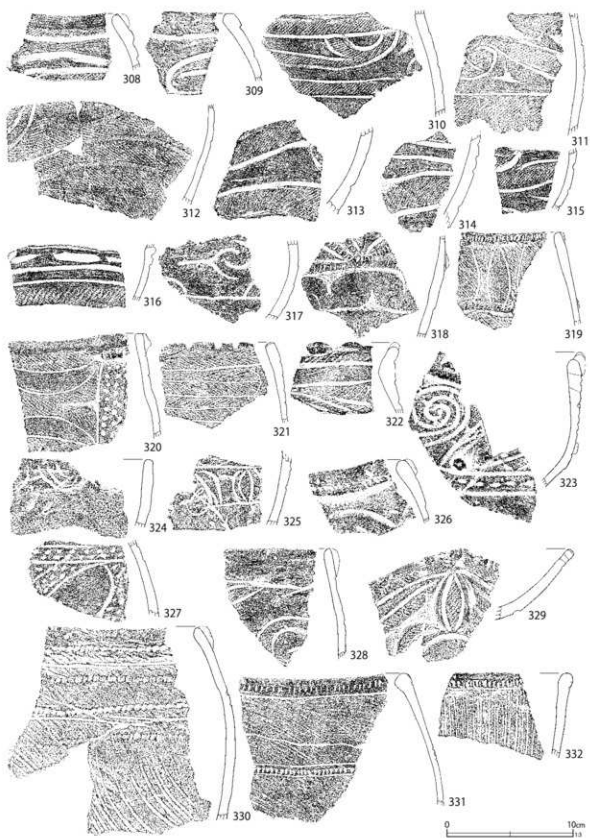
第298図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (11)



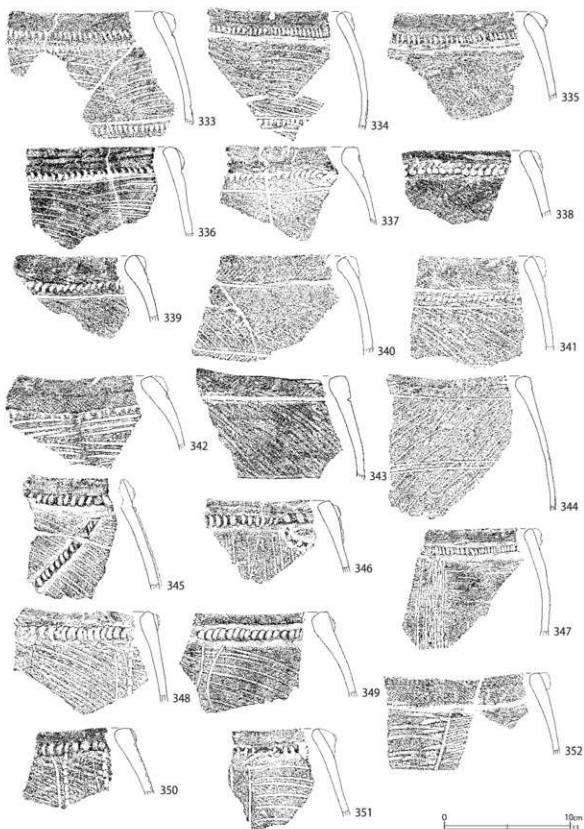
第299図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (12)



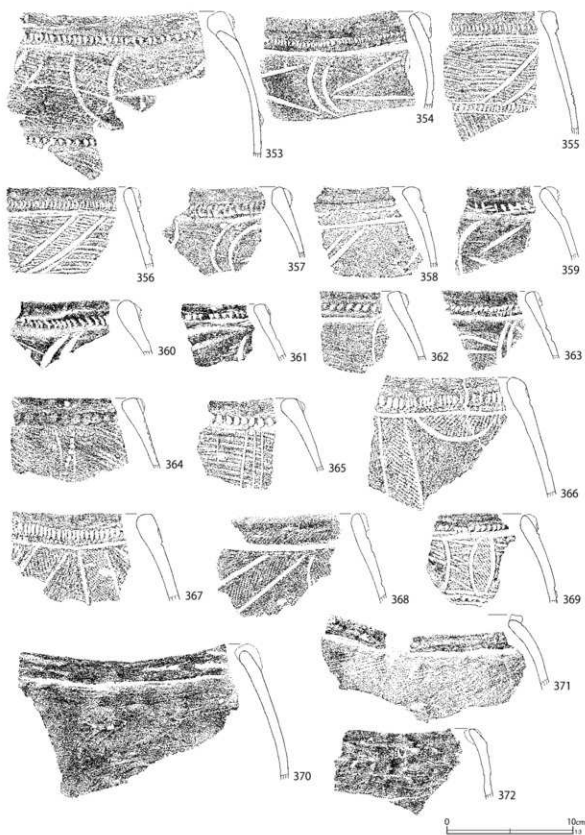
第300図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (13)



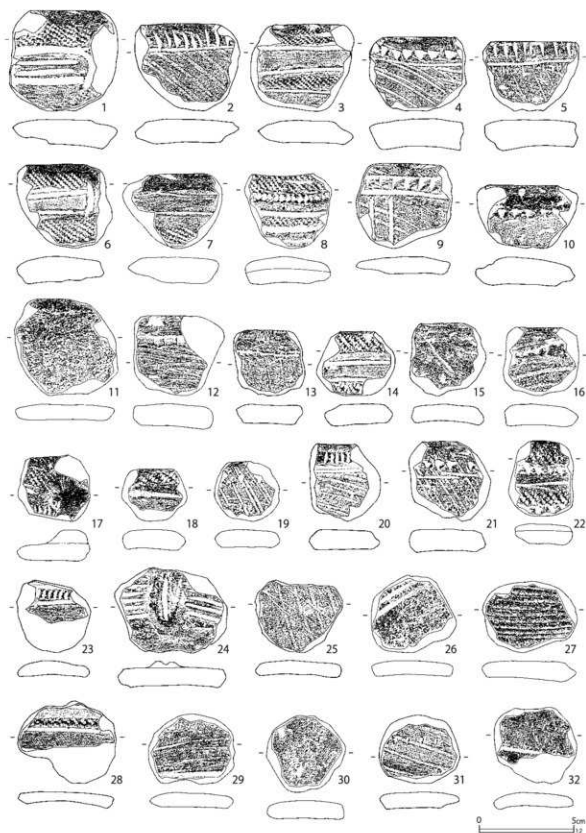
第301図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (14)



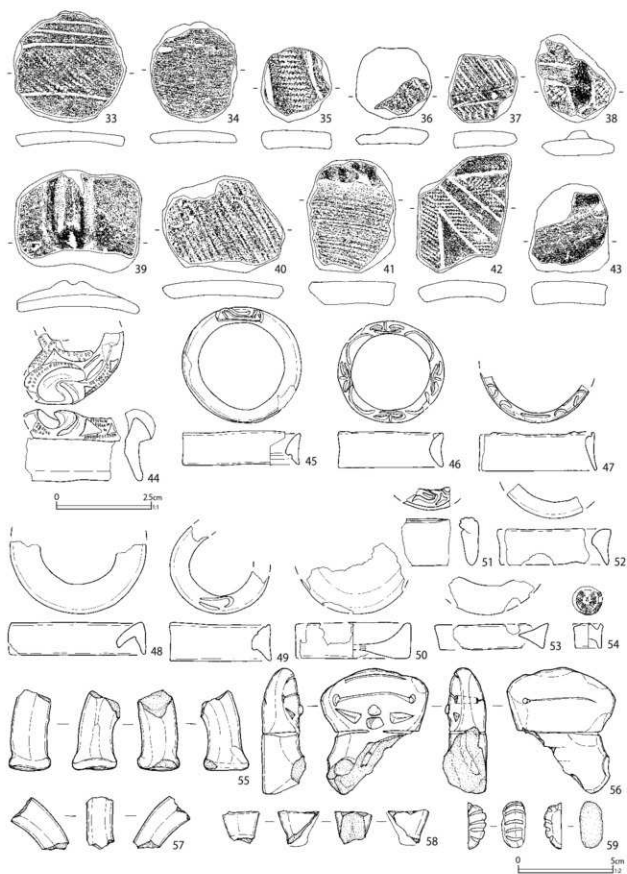
第302図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (15)



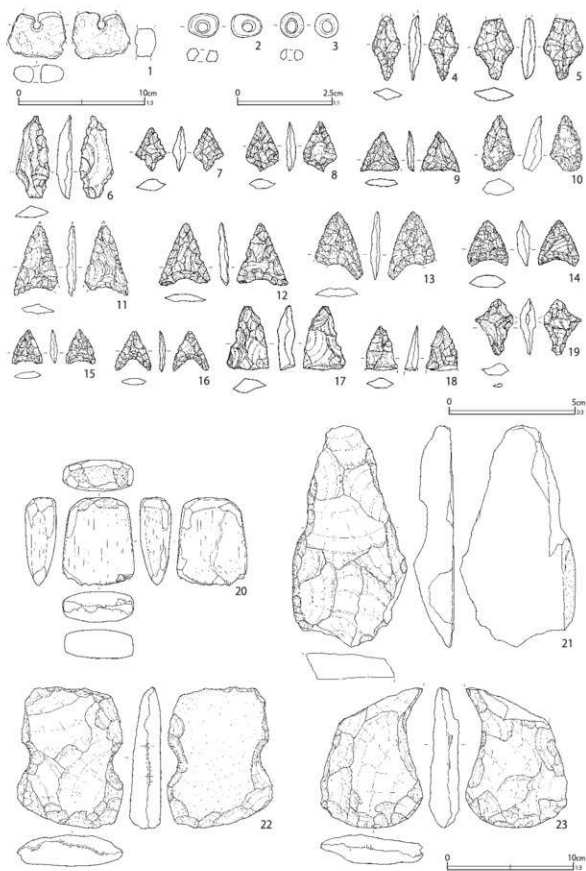
第303図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (16)



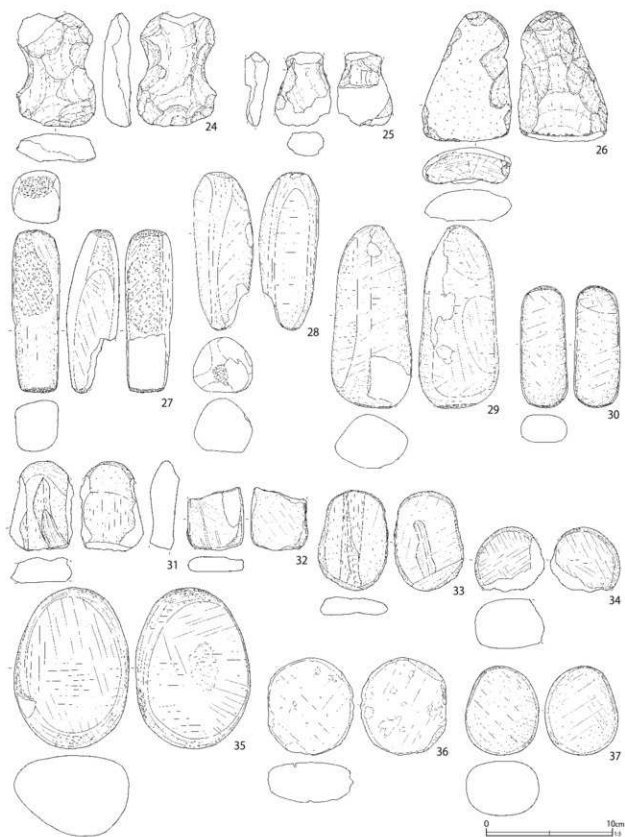
第304図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (17)



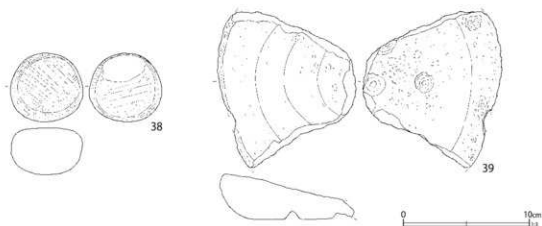
第305図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (18)



第306図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (19)



第307図 盛土 (J-6グリッド) 出土遺物 (20)



第308図 盛土（J-6グリッド）出土遺物（21）

推定口径23.4cm、残存高21.8cmである。

30は口唇が平坦に面取りされているが、胴部の沈線が一条で、刺突も施されていない。推定口径20.2cm、残存高17.4cmである。

31は沈線間に刺突が施されないものと思われる。推定口径20.2cm、残存高8.3cmである。

32～34は紐線文系土器の底部である。

35～46には無文の底部を一括した。このなかには、41～43のように底部圧痕を持ち、後期後半と推定される個体も含まれている。

47～372に破片を掲載した。47は連弧文系土器である。48・49は磨消懸垂文、52は口縁部文様下に蕨手状の沈線文が配された加曽利EⅢ式である。

50・51・53～71は堀之内1式、72～79は堀之内2式である。

80～116は加曽利B式、117～158は曾谷式、159～166は矢羽状沈線文の土器、167～176には口唇部縄文施文の土器、177～185は無文土器、186は縄文施文の粗製土器、187～193は縄文地文で条線が施された紐線文系土器である。

194～240は安行1式である。241～265は安行2式、266～285は安行3a式～3b式の土器群と考えられる。

286～300は三叉文が文様空白部に配された安行3a式、301～318は三叉文でモチーフが描かれた

土器群で、安行3b式と考えられる。

319～323は姥山氏器形の土器、330は同様のモチーフ間に縄文が充填された土器、324～329は沈線で文様が描かれ、324・328には刺突が充填されている。

331～370には紐線文系土器を掲載した。371・372は無文の粗製土器で、晩期の所産であろう。

土製品（第304図～第305図54）

J-6グリッドからは、土製品も多く出土しており、特に土製円盤の出土量が多い。

1～43に土製円盤を一括した。形状は、方形や長方形、楕円形で口唇部破片を利用したものが目立つ。

44～54は耳飾りである。44～53は環状の耳飾りで、このうち44～47、49・51には文様が施されている。

44は端部が外反し、印刻や沈線による文様が施されている。空白部には細かな刺突が充填されている。45は片面1箇所のみ沈線文が施されている。49も同様の構成であろう。46は片面前面に沈線文が施されている。47も同様の構成であろう。

51は細片で全容が不明だが、片面全体に文様が施されるものであろう。

48・50・53は残存部位は無文である。

54は小型中実の耳飾りで、片面に沈線が廻り、

細かな細長い刺突が充填されている。

土偶 (第305図55～59)

55は右脚である。現存高は2.7cmである。無文である。色調は黄褐色から灰黒色を呈し、胎土は密、焼成は良好である。後期の土偶である。

56は中型土偶の頭部である。左肩以下の部分に完全に欠損している。右腕はやや前方に突出しているのがわかる。額部には細沈線が2条施され、顔面部分を区画する沈線の両端には刺突が見られる。ただし、右端の刺突は盲孔で、左端の刺突は後部まで貫通している。後頭部にもこれに対応する細沈線が施される。両眼は楔形の刺突、鼻は円形粘土の貼付、口は、ほぼ円形の刺突で表現されている。また、頸部にも沈線が巡り、胴部と区画される。粘土板を前後に貼り合わせて成形したと思われる、破損面にはその痕跡が残る。現存高は7.0cm、頭部の幅は5.7cm、厚さは約2.0cmになる。表面全体に赤彩が施されているが、地色は灰褐色から黒褐色を呈している。胎土は比較密で、長石が目立つ。焼成は良好である。後期後葉の土偶である。

57は左腕で、現存高は2.8cmである。無文で腕の断面はほぼ円形である。色調は橙褐色で、胎土は密、焼成は良好である。後期の土偶である。

58は右脚である。無文。現存高は1.7cmである。地色は黒色で、表面には赤彩が見られる。胎土は密である。赤彩の状態から56と同一個体の可能性がある。

59は土偶の装飾の一部である。大型土偶の背面中央部に並列して施されるコブ状の装飾であろう。現存高は2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.9cmになる。背面には剥離面が明瞭に残る。色調は灰褐色で、胎土は密、焼成は良好である。晩期の木莚型中空土偶の一部であると思われる。

石製品 (第306図1～3)

第306図1～3が石製品である。1は台形状に整形され、貫通孔と溝を持つ製品で、垂飾と考え

られる。

2・3は石製の玉で、円形板状に整形され、円形の貫通孔を持っている。

石器 (第306図4～第308図39)

4～18は石鏃である。4～8は有基、9・10は平基、11～16は凹基である。17・18は欠損品である。

19は石鏃で、1点のみである。

20は磨製石斧で、恐らく基部が欠損後に再加工されたものであろう。

21～25は打製石斧である。

26は三角形に剥離され、端部に摩耗痕が残ることから、敲石であろう。

27～30は敲石、31～33は砥石、34～38は磨石である。

39は石皿で、表面に窪みが見られる。

J-7グリッド

土器 (第309図1～第315図192)

1は口唇が内湾する鉢形土器である。無文の口唇下を廻る沈線の端部が鉤状となるほか、刺突が施される個所がある。沈線間にはL R縄文が充填されている。器面は丁寧にミガキが施された丁寧なつくりの土器である。加曽利B 1式である。推定口径21.0cm、残存高6.6cmである。

2は胴上半で強く内湾する鉢形土器で、平行沈線と刺突により文様帯が区画されている。胴上半には円形刺突を連結する下向きの弧線文が配されている。胴下部には平行沈線が上向き弧状に配され、交差する弧状の沈線で連結されている。沈線間にはL縄文が充填されている。加曽利B 2式である。推定口径20.0cm、推定最大径24.6cm、残存高14.2cm、推定器高15.0cmである。

3は頸部が外反し口唇部が内屈する深鉢形土器である。口唇部に二条の沈線が廻り、L R縄文が充填されている。頸部は無文である。加曽利B 2式である。推定口径12.2cm、残存高6.9cmである。

4は口唇部が内屈する鉢形土器である。口唇部

に二条の沈線が廻り、L R縄文が充填されている。胴部には矢羽状の沈線文が施文されている。加曽利 B 2 式である。推定口径 32.0cm、残存高 9.2cm である。

5 は後期後半の壺形土器と推定され、残存部分は無文である。推定口径 10.2cm、残存高 4.5cm である。

6 は強く外反する口頸部を持ち、後期後半の深鉢形土器であろう。推定口径 33.2cm、残存高 4.8cm である。

7 は胴上部ですぼまり、口唇が外反する深鉢形土器である。器面に輪積み痕が残り、晩期の粗製土器の可能性がある。推定口径 18.8cm、残存高 14.3cm である。

8 は無文で、恐らく晩期の小型の壺形土器であろう。推定口径 8.6cm、残存高 4.6cm である。

9 は台付土器で、台部上端を廻る隆帯には、押圧が施されている。

10 は無文の深鉢形土器で、器面にはミガキが施されている。後期後半であろう。残存部最大径 14.2cm、残存高 9.1cm である。

12 は器面に R L 縄文が斜位に施文され、胴下部にはミガキが施されている。後期後半であろう。残存部最大径 20.0cm、残存高 15.7cm である。

11・13～15 に後期後半の底部を一括した。11 は R L 縄文が横位に施文され、原体末端の圧痕が残されている。網代痕を有する。

13～15 は無文で、13・15 にはミガキが施されている。14 には網代痕が残されている。

16～20 には、晩期の粗製土器を一括した。

16 は折り返し口縁の深鉢形土器で、口唇部に貼付された隆帯には、押圧が施されている。推定口径 34.2cm、残存高 9.3cm である。

17 は粘土の輪積み痕が残され、器面は縦位の粗いナデが施されている。内面も粗いナデ整形である。残存部最大径 21.0cm、残存高 19.4cm である。

18～20 は粗製土器の底部で、18・20 には指頭に

よる整形痕が残されている。18 には網代痕が、19 には木葉痕が残されている。

21～192 に破片を掲載した。21 は加曽利 E III 式、22～44 は堀之内 1 式、45～55 は堀之内 2 式である。

56～121 は加曽利 B 式を一括した。56～65 は B 1 式で、60～65 は注口土器である。66～77 は B 2 式、78～92 は B 3 式であろう。93～102 は口唇部に縄文施文される土器群、103～121 は格子目文や矢羽状沈線文が施文される土器群である。

122～129 は曾谷式土器である。130～139 は縄文地文に沈線文や条線が施文される紐線文系土器、140・141 は縄文地文、142 は無文の土器である。

143～156 は安行 1 式、157～163 は安行 3 a～3 b 式、164～177 は安行 3 b 式である。

178～187 は紐線文系土器、188～192 は晩期の無文粗製土器である。

土製品 (第315図193～205)

193～202 は土製円盤である。193～197 は口縁部破片を剥離し、台形状に仕上げられている。198～202 は円形や楕円形状に剥離加工されている。

203～205 は耳飾である。203 は環状で、片面端部が平坦に仕上げられている。無文である。

204 は中実小型の耳飾である。中央部の刺突を中心に、片面端部が肥厚し花弁状に仕上げられ、刻みが施されている。

205 は小型筒状の耳飾で、片面に沈線文が施文されている。

土偶 (第315図206・207)

206 は中空土偶の右腕の破片である。肩章の一部が残り、部分的に刻みが見られる。内面には輪積み痕が明瞭に残る。現存高は 6.2cm で、器壁の厚さは 0.6～0.9cm ほどになる。色調は黒褐色、胎土は密で褐色粒子が混じり、焼成は良好である。晩期の木莖型中空土偶の一部であろう。

207 は左脚で現存高は 2.8cm である。無文。色調は黒褐色、胎土は密、焼成は良好である。晩期の土偶であろう。